

日 時 平成25年6月12日（水）9：00～12：00

会 場 高知県立春野高等学校

出席者 井上喜雄委員、山崎隆委員、東章子委員、近藤三千代委員、大野吉彦委員、  
山崎實樹助委員、山崎道生委員、森山泰広委員、桑原光照委員  
教育次長（中山）、高等学校課長（藤中）、企画監（小野）、課長補佐（竹村、高野）、  
再編振興チーフ（竹崎）、定通・産業教育チーフ（正木）  
指導主事（農業・水産担当、工業・情報担当、家庭・看護・福祉担当、商業担当、  
再編振興担当2名）  
春野高等学校（横川学校長、山脇教頭）

#### 配付資料

- 座席図
- 式次第
- 平成25年度 高知県産業教育審議会委員名簿
- 参考資料
  - ・ 産業教育振興法
  - ・ 高知県産業教育審議会条例
  - ・ 高知県産業教育審議会規則
  - ・ 高知県産業教育審議会議事運営規則
- 資料1 平成24年度高知県産業教育関係実績書
- 資料1-1 平成24年度産業系専門学科及び総合学科等における検定・資格等の取得状況調査
- 資料2 平成25年度産業教育関係事業計画
  - ・ 産業教育民間講師招へい事業計画
  - ・ 企業を知ろう事業（生徒の企業見学事業）計画
  - ・ 仕事を知ろう（インターンシップ（就業体験））計画
  - ・ 農林業体験インターンシップ事業
  - ・ 高知県地域産業担い手人材育成事業 実施計画
- 資料3 平成24年度産業教育審議会概要
- 資料4 県立高等学校再編振興計画に関する報告
- 資料4-1 県立高等学校再編振興に関する報告
- 資料5 産業教育の振興について
- 資料6 進路状況及び学力定着把握検査について
- 補足資料
  - ・ 「高校生採用に関する企業アンケート調査」報告書（平成25年3月）
  - ・ 「社会の変化に適応した今後の産業教育の在り方」について

平成19年12月11日 高知県産業教育審議会 答申

1 開会

- (1) 教育委員会挨拶
- (2) 審議委員の紹介
- (3) 事務局の紹介
- (4) 会長・副会長選出

- ・会長に井上喜雄委員が推薦され、承認される。
- ・副会長に東章子委員が推薦され、承認される。

2 学校視察及び説明

- (1) 学校視察（施設・設備及び授業）
- (2) 学校説明

【質 疑】

井上会長 : 進学者はどのような分野に進学しているのか。また、生徒（学校）が良くなった取組にはどのようなものがあるか。

学校長 : 4年制大学の進学者は県外大学に進学しており、福祉分野への進学者は県内の短大や専門学校に進学している。医療、福祉分野を希望する生徒が多くなっている。

総合学科の課題として、ホーム担任がクラスの生徒の動向を把握するのが難しいことがあげられる。そこで、生徒の情報を一括管理し情報を共有する取組をすすめている。

山崎（隆）委員 : 生徒を側面から支えるという話があったが、生徒に主体性をもたせる取組としてどのようなものがあるか。

学校長 : 例えば、6月に実施される「アジサイウォーク」では、本年度から生徒会が主導し、各自が課題をもって取り組み運営にあたっている。

山崎（道）委員 : 今の課題は何か。

学校長 : 現在一番問題となっていることは、保護者への支援についてである。

(3) 資料説明

(4) 議事

- ① 平成24年度 産業教育の取組状況 説明
- ② 平成25年度 産業教育の事業計画 説明
- ③ 平成24年度産業教育審議会の概要 説明
- ④ 県立高等学校再編振興計画に関する報告

【質 疑】

井上会長 : 工業科の募集の傾向について詳しい説明をいただきたい。

竹崎チーフ : 安芸桜ヶ丘高校などはなかなか定員に達していない。高知東工業高校など学校や学科によって差がある。

井上会長 : どうして安芸桜ヶ丘高校の環境エネルギー科は生徒数が少ないのか。

前田指導主事 : 環境エネルギー科は、平成22年度から急激に生徒数が減っている。確実な原因についてはわからないが、私学を希望する生徒や、通学の範囲に高知東工業高校があること、安芸地区の生徒数が減少したことなどによるのではないかと。

山崎（道）委員 : 初歩的な質問だが、学科を再編するのか、廃校・統合など、どういう論点で進んでいるのか。

藤中課長 : 学科改編という形で魅力化を図ったり、生徒数が少なくなる地域では、学校

を統合するという両方の面で考えている。

山崎（道）委員：少人数できめ細かな指導が良いのか、マンモス校で競争・触れ合いながらのどちらがいいのか。

藤中課長：小規模校では指導はきめ細かにはなるが、切磋琢磨で学びあうことやグループ活動やクラブ活動などを考えると、一定規模をもった学校が基本となる。しかし、高知県の現状では難しい。小規模校でも魅力化を図る必要がある。

井上会長：環境が厳しくなり工夫していかなければいけない状況になっている。

藤中課長：安芸桜ヶ丘高校も学科改編など工夫しているが、東部地区は生徒数の減少に対して学校数が多いという状況がある。

山崎（道）委員：教育委員会では県予算の削減の制約を受けているのか。

藤中課長：教育に関しては全面的な支援をいただいている。しかしながら、小規模校ではコスト面をつめられているところはある。

井上会長：基本的な考え方をしっかりもち両立させる必要がある。

藤中課長：ここ10年、生徒減でコスト面だけで考えていくと、地域の学校がなくなってしまう。可能性の平等という視点からはどうなのかという意見を検討委員会でいただいている。

井上会長：本日の校長の話などがヒントになるのではないかと。

藤中課長：産業系専門高校で専門性を学ぶのか、一定の基礎を身に付け、次のステップに進むのが議論となっている。

東委員：専門学科で将来のスペシャリストとしての基礎基本を習得とあるが、具体的にはどのようなものか。

藤中課長：将来のスペシャリストとしての基礎基本というのは、就職を目指す生徒にとっては必要な資格を取らせ、同時に将来の選択肢ができるよう基礎基本をしっかり習得させていくということである。

井上会長：水産の問題はどのようなところか。

竹崎チーフ：定員が集まらない状況が続いている。また、水産を希望して志願する生徒も少ない状況にある。

井上会長：水産高校は1校だけであり、工業高校と状況が違う。どのように考えるのか。

藤中課長：水産は生徒数の減少により海洋高校1校のみとなっている。水産は生徒にとって馴染みが薄い。立地条件的にも海洋高校に行きたいというよりは、最後の選択肢として進学する生徒もいる。

井上会長：水産は高知県において非常に重要である。

山崎（道）委員：一昔前は需要があったが、現在の高知県ではどうか。水産業のリアルで基本的な情報を集めることが必要。

井上会長：現況についてはどうか。

藤中課長：現在、食品科学コースと航海コースと機関コースの3つのコースがあり、1年生はくくり募集で入学し2年生で分かれる。それ以外に、船舶養成課程5年間で資格を取得するコースがある。

土佐海援丸を所有し、それを活用して、資格を取得することができ、それを売りにしている。本来、水産高校の生徒は、将来水産関係に進むことができるというブランドによって、生徒が集まって欲しいところだが、現状、そのような希望をもって入学する生徒が少なく、限られた生徒しか集まっていない。水産高校に進学した時に何ができて何ができないのか、どういった方面に進むことができるのかといったことなどが、不透明な部分がある。

- 井上会長 : それについては、海洋高校だけでなく、高校生がどこを選ぶかを考える時、将来の夢が見えているのかどうかということは重要である。そのあたりが、水産業でも見えてくれば良い。
- 藤中課長 : 県では産業振興計画において、水産関係の担い手確保のための様々な事業をしているが、高校側からは先の段階が見えてこない。
- 中山次長 : 資料の学校概要に海洋高校のデータがある。参考にご覧いただきたい。  
基本情報のところには、出身中学別の内訳が掲載されているが、高知市内の中学校からの入学生が多い現状である。  
内航船への乗員の需要は一定あり、給料面や待遇面をPRしていくことは大事である。他の都道府県では所有が難しい海洋実習船を所有していることから、四国の養成機関として海洋高校の魅力化を図っていけないのではないかと考えている。
- 井上会長 : 全国から人が集まってくる可能性もある。奥の深い問題であり、またの機会に議論していく。

#### ⑤ 産業教育の振興の在り方について

##### 【質 疑】

- 森山委員 : 学力把握調査のP.12について、義務教育との連携した取り組みはしているのか。
- 藤中課長 : 平成19年度より全国学力学習調査を、高知県ではすべての小・中学校で実施しており、学力向上に取り組んでいる。高校でもそれにつながる形で取り組んでいる。
- 山崎(道)委員 : 就職試験の際、三角関数を理解しているかという点を評価している。商業高校では商業簿記と敬語の使い方を見ている。  
各教科でこれだけは自信があるというものを身に付けさせることが必要である。
- 東 副会長 : ほとんどの学校で基礎学力が身に付いていないという状況があり、これらに向けて取り組んでいただきたい。
- 大野委員 : 高等学校で中学校の学習内容を理解していないという問題がある。義務教育9年間、保育園等から15年間のスパンで考え取り組んでいく必要がある。  
現在小学校は全国レベルに、また、中学校も全国レベルに近づき、良い方向に向かっている。  
高等学校における学習意欲の向上という面において特に必要なことは、中学校で進路指導をする時、しっかりとした目的をもって産業教育の学校に進学しているか、目標をもって次のステップに向かっているかという点が重要な要素になる。義務教育段階で生徒や保護者としっかり話し合い、目的意識の醸成をすることが、その後の学力向上につながり、中途退学の防止にもつながると感じている。  
また、体験活動については、義務教育においても、職場体験学習などに参加した生徒は大きく成長する。体験活動を積み重ねキャリア教育を行っていくことが大事である。  
中学生卒業時に、自分の進路について決めることは難しいが、キャリア教育を通じて将来を考えさせることができるのではないかと考えている。
- 近藤委員 : P.13~14のデータは、産業系の高校だけでなく、他学科の高校でも同じよう

- な問題があるのではないか。
- 藤中課長 : 産業系の高校に限らずD3ゾーンの生徒がいる。生徒の実態を把握し、その実態に合わせた指導方法の工夫・改善のために調査を実施している。2年目の今年は2学年でも実施した。
- 大野委員 : 普通科での取組はどうか。
- 藤中課長 : 普通科でも同じような状況がある。普通科は専門学科より漠然とした思いで、入学してくる生徒が多い。キャリア教育という視点でいろいろな情報や体験的なものを与えながら取り組んでいる。
- 山崎(隆)委員 : 積極的な取組により学校が変わってきた特徴的な点としては、先生が生徒に寄り添い、クラブ活動やイベント活動が活発になっていることなどがあげられる。これらの成功事例を検証し、魅力ある学校づくりの参考にしてもらいたい。
- 桑原委員 : 基礎学力の向上については、授業改善を行い、学校内で個々のレベルに応じた教育をする必要があるではないか。外部機関に頼らずにできないか。
- 東副会長 : 教員の人材育成という面で、委員会、学校での取組が必要ではないか。